

☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!  
★幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!  
☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

## 史料ネット News Letter

第63号 2010年7月30日(金)

発行：歴史資料ネットワーク



▲ 第5回 地域史卒論報告会のようす  
(2010年3月20日、  
於：神戸市立兵庫勤労市民センター)



▲ 長濱家文書返却のようす  
(2010年5月20日)

### CONTENTS

- 巻頭言  
歴史資料ネットワークの16年目によせて ————— 人見 佐知子 (2)
- 2010年度歴史資料ネットワーク総会の記録 ————— 板垣 貴志 (4)
- 兵庫津歴史講演会——パネルトークを終えて—— ————— 中野 賢治 (5)  
兵庫津歴史講演会に参加して ————— 前田 章賀 (5)
- 第5回 地域史卒論報告会開催される ————— 吉原 大志 (7)  
地域史卒論報告会感想 ————— 井澤 禎明 (7)  
地域史卒論報告会を終えて ————— 中野 佳和 (8)  
第5回地域史卒論報告会参加記 ————— 細川 絵美 (9)
- 【連載】史料ネット **古文書返却の旅** その二 長濱家文書 ————— 添田 仁 (10)
- 2009年台風9号被災史料救出活動支援募金会計報告 ————— (12)

## 歴史資料ネットワークの16年目によせて

人見 佐知子

わたしが事務<sup>うらみ</sup>として史料ネットにかかわって約10年になる。最初はお手伝い程度の気楽なものであったが、2002年6月の組織改組の際、事務局員という肩書きを与えられ(官僚化?)、それからは会費・会員名簿の管理などを任されるようになった。ここ1~2年は、ニュースレターの編集も引き受け、原稿取り立ての厳しい鬼編集長として恐れられている。

そのわたしが巻頭言を書くのは、野球における記録員がいきなりバッターボックスにたつようではなはだ気が引けるが、せっかくの機会なので、日頃史料ネットについて思っていることを書いてみたい。

引き受ける気持ちになったのは、実は、もうひとつ理由がある。ある後輩から最近こんなことを言われた。「事務局員って日の目を見ない仕事ばかりでつまらないですか」。そのときわたしはとても困惑した。その瞬間はなぜ自分が困惑したのかよく分からなかったが、その理由を考えるうちに、わたしは事務局員として会員と一番近い位置で史料ネットにかかわっている(会員の名前をほぼ全員覚えている)、会員と史料ネットをつないでいるのは事務局員なのだという、おこがましくも小さな自負を抱いていたことに気づいたのである。

さらにこの小さな「事件」は、歴史学の末席を汚すわたしなりに、史料ネットと歴史学の関係との関わりを考えるきっかけになった。

史料レスキューに参加していつも驚くことは、地域にこんなにも豊富な史料が存在するというまぎれもない事実である。不幸にも災害にみまわれ、史料ネットがかかわった地域だけでこんなにも豊富な史料が存在するということは、いまだ発見されていない多くの史料が地域に埋蔵しているということである。これを、歴史学の問題として考えると、現在の書かれた「歴史」がいかに偏った史料で描かれているかということに思いを至さざるを得ない。

もちろん、あらゆる史料を網羅することなしに歴史は書けないと言いたいのでは毛頭ない。しかし、史料ネットの実践によって明らかとなった、歴史家がいかに一部の偏った史料によって歴史像を形成してきたかという重大な問題は真摯に受け止めてしかるべきであると思う。他の人文・社会科学と決定的に異なる歴史学の独自の存在意義が、史料にもとづく実証主義に担保されていると考えるならば、未発見の膨大な地域史料が存在するとの認識に立って、それでもなお歴史の全体像の形成を目指すという姿勢は、歴史学者に不可欠の要件である。

他方、佐用郡でのレスキュー活動を通して、これまで史料ネットが看過してきたのではないかという問題に思い当たった。それは、「家族(家)」の歴史である。史料ネットはこれまで、「地域」の歴史にこだわってきた。災害復興の基本には地域の歴史が不可欠ではないか、そのためには史料保全が必要であるという思いである。

しかし、その前提には「家族(家)」の復興がなければならない。それぞれの「家族(家)」の再生なしに、地域の復興はあり得ない。今回のレスキュー活動で通常歴史資料とは認識されにくい、いまある家族の写真や記録を扱ったことでその思いを強くした。

「家族(家)」の歴史まで踏み込むと、歴史の全体像は描けないと批判されるかもしれない。しかし、特殊から普遍を導く営為は歴史学の根源的な課題であるし、市民社会を支えるのは個々人

であり、個々人の歴史を遺そうとする意志こそが歴史学を支えるのだとすれば、レスキュー活動は、史料の発見・整理・保存という歴史研究の基礎的な作業を住民と共に行い、またその史料から地域の歴史像が形成される過程をとともに探究することによって、歴史学の方法や学問的意義を住民と共有することができるという意味で、未来における歴史研究の可能性を示唆している。つまり、史料ネットは現代の市民社会における歴史(学)の方法論に対する実践的な問いかけである。

「家族(家)」や個々人の歴史への注目は、史料ネット発足の契機となった阪神・淡路大震災で生まれた大量の震災資料のもつ意味とも深く関連する。震災後に大量に生み出されたいわゆる「震災資料」は、個々の市民がその記憶を歴史として継承したいという強い意志の顕現に他ならない。震災資料もまた、歴史(学)の方法論へ核心的な問いを投げかけている。ひとつは、震災資料の検証が、史料の発生から整理、保存、そして歴史像の形成へと市民が歴史研究者と共同でたどる、これまでにはなかった歴史研究の新たな方法的実践となるという、史料ネットのレスキュー活動と共通の問題である。つまり、史料ネットの実践は、歴史資料を市民社会のなかに如何に位置づけることができるかという問いであるということができよう。

もうひとつは、歴史学が同時代史にいかに向き合うかという問題である。同時代史を可能にするのは、体験／非体験の差ではなくて、研究対象と課題に対峙する歴史研究者の主体性の確立である。裏を返せば、同時代史研究の必要性は、対象に対する歴史研究者の主体性の確立から生じる。震災資料は、歴史研究者が現代社会といかなる緊張感をもって接するべきかという、歴史研究の存在意義に関わる問いを投げかけているのである。

阪神・淡路大震災を期に発足した史料ネットは、当時の活動を史料ネットの活動の第一期とするならば、2002年の組織改組を画期とし(第二期)、水害対応を経て(第三期)、水害対応を含めてこれまでの経験を総括すべき新たな段階にきていると思う。この15年で史料ネットの中心的な担い手もずいぶん様変わりした。しかし、現在の市民社会と歴史学は如何にして切り結ぶかという課題の重要性は、いや増すばかりである。

「事件」からずいぶん飛躍した感があるが、つまり、事務局(と個々の会員)は、歴史学があまりかえりみることのなかった全体を支える個人に対比されるのではないかと思うのである。ニュースレターや会費の納入を通じての会員とのやりとりのなかに、わたしは市民と史料ネットの実践を切り結ぶ実感を味わっている。(減多にないか) 会費の振り込み用紙に書かれる一言に、会員と問題意識を共有しているという手応えを(勝手に)感じているのである。

こうした実感を自己満足で終わらせないために、新年度を迎えて、史料ネットの運営が滞りなくかつさらなる発展をめざせるように、と意気軒昂たる思いでいる。

巻頭言にしては、ずいぶんと長くなってしまった。皆様のご意見・ご批判をお待ちしています。

(ひとみ・さちこ／歴史資料ネットワーク事務局員)

#### ■受贈図書

学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻編『記録を守り 記憶を伝える

—学習院大学大学院人文科学研究科アーカイブズ学専攻開設記念誌—』(2010年3月発行)

伊丹市立博物館『地域研究いたみ』第39号(2010年3月発行)

立命館大学歴史都市防災研究センター 京都歴史災害研究会編『京都歴史災害研究』(2010年3月発行)

## 2010 年度

# 歴史資料ネットワーク総会の記録

歴史資料ネットワークの2010年度総会が、2010年6月5日(土)に西宮市大学交流センターにて開催された。藤田明良副代表の開会の辞の後、議長として深見貴成氏、書記として板垣貴志がそれぞれ選出された。続いて、議長より個人会員が161名、出席会員数が16名、議決権行使者数が16名、委任状提出者数が43名であることが報告された。

その後、議案の審議に入った。第1号議案は、中野賢治事務局長より2009年度の活動報告として、(1)2004年台風23号に伴う文書整理と受入(主として田尻家文書の調査進捗状況)、(2)市民と自治体との連携を重視した地域史研究や地域遺産保存・活用の取り組み(中世市民講座や、山形での技術交流会、宮城ネットとの技術交流会、佐用町での現地説明会、兵庫県立歴史博物館でのミニ展示、地域史卒論報告会など)、(3)震災記録保存と文化財防災(各地で開催された水損史料修復ワークショップや第2回落合重信賞を受賞したこと)、(4)災害対応(主として2009年度台風9号被害に対する災害対応を中心に)、(5)組織と運営(ブログの現状報告、書籍売り上げ報告、会員数推移動向など)の5項目が提示された。

次いで、人見佐知子事務局員より第2号議案である2009年度決算報告がおこなわれ、それを受けて三好英樹会計監査委員より第3号議案である監査報告がなされた。会計監査委員からのコメントとして、シンプルな会計システムの構築を検討することを改善策として求められた。これらの議案については、いずれも質疑応答を経た上で、出席者の議決によって承認された。

その後、中野事務局長より第4号議案として2010年度活動方針、人見事務局員より第5号議案として2010年度予算案が提示された。活動方針は、おおむね前年度を継承しつつ、前年度救出した台風9号被災史料の調査・整理・返却に取り組んでいくことや、ホームページ担当を置くことが掲げられたことは特筆すべきことと思われる。予算案に関しては、計上項目の内容に関する説明がなされた。板垣から出版予定となっている震災資料ブックレットに関する報告、松下正和副代表より、史料の裏打ち実習が開催予定であること、中野事務局長より今後の田尻家文書調査の予定、大国正美運営委員より市民歴史講座の予定、人見事務局員より戦跡ウォークの告知がなされ、今後とも阪神間の市民団体との協力関係を強化することが再確認された。

最後に、第6号議案として、2010年度運営委員の選出がおこなわれ、奥村弘代表による閉会の辞をもって、総会は無事終了した。

(※総会の議決録は別刷りにて同封していますのでご参照下さい)

(いたがき・たかし／歴史資料ネットワーク運営委員)

### ◆◆会費納入のお願い

新年度を迎えました。本ニュースレターとともに会費納入依頼状と振込用紙を同封しております。ご多忙中のことと存じますが速やかな会費納入へのご協力をお願い致します。

- ・個人会員 5000円(ニュースレター購読料を含む)
- ・学生・院生会員 2500円(ニュースレター購読料を含む)
- ・サポーター 一口3000円～(ニュースレター購読料を含む)
- ・ニュースレター購読のみ 1000円

# 兵庫津歴史講演会

## ーパネルトークを終えてー

中野 賢治



2010年2月27日、兵庫公会堂での兵庫津歴史講演会において、神戸大学名誉教授の神木哲男氏の講演「中世の瀬戸内海と兵庫津ー「兵庫北関入船納帳」が語るものー」が行われました。その講演にさきだって、理解を深めてもらうために、パネルトークと題して、15世紀の兵庫津、および「兵庫北関入船納帳」をめぐる状況について、パワーポイントを用いて説明をさせていただきました。これは、あまり一般に馴染みのない史料に即したお話になりそうだとということで、事前にある程度の前提を確認してもらおうという趣旨で企画されたものです。例年大人気のこの講演会ですが、今年も盛況で、事前申込はあっという間に締切を迎えていたようです。

連続的に行われる市民講座では、回を重ねるにつれて、繰り返し参加されている方とそうでない方とで認識や知識に差がついていくのが普通です。そのときに、こうした“前座”があるとなんてでは、講演を聞いた後に残るものが多少なりとも違ってくるのではないのでしょうか。今回は1445・6年の「入船納帳」を知る前提として、15世紀の兵庫津をめぐる諸状況について、室町幕府との関係や全国流通網のなかでの兵庫の位置などを、高校の教科書などをもとにかみくだいて説明しました。なお、講演の内容については、前田章賀氏の文章をご参照ください。

後から思えば、早口であったとか、パワーポイントの使い方に慣れていなかったなど、いろいろな反省点があるのですが、それ以上に、いろんな方から「わかりやすかった」という評価をいただけたのが大変うれしかったです。市民の認識と研究者のその乖離は、よく指摘されるところですが、実はそこを埋める可能性をもつのが、こうした市民講座での「説明」の試みなのではないかと思います。また私自身が、市民と研究者の間に立つ学生という身分だからこそできたことだともいえます。とはいえ、本当はもう少し若い、学部生や修士課程の大学院生あたりが担当すると、市民のみなさんも親しめるでしょうし、学生自身の勉強にもなるでしょう。今後は、教職を目指す学生を中心に、後輩をどんどん動員していきたいと思います。

最後に、講演会終了後、中学生の女の子が僕と神木氏にサインを求めてきてくれました。全く経験のないことでしたので、戸惑いながらもサインを書かせてもらいました。歴史に対する関心を、わずかであってもその子に持ってもらえたということが、今回の一番の収穫でした。

(なかの・けんじ／大阪大学大学院後期博士課程・  
歴史資料ネットワーク事務局長)

## 兵庫津歴史講演会に参加して

前田 章賀

去る2月27日、今回で4回目を迎えた「兵庫津歴史講演会」が、兵庫区民まちづくり会議、歴史資料ネットワーク、兵庫区役所の共催で講演テーマはあまり聞き慣れない「兵庫北関入船納

帳」と云う一見難しそうなテーマにも関わらず定員 300 名を超す盛況ぶりで参加者の地元に関わる歴史の関心度の高さと此のシリーズの人気の高さをうかがい知る思いであった。

先ず始めに大阪大学大学院生で歴史資料ネットワークの事務局長をされている中野賢治氏から「兵庫北関入船納帳」の背景についてのパネルトークがあり、兵庫関の概略が把握でき、兵庫津が平清盛によって日宋貿易の拠点として繁栄した平安末期の時代、遡って北風家や高田屋嘉兵衛が北前船で活躍した江戸後期の時代が歴史上有名な出来事として採り上げられているが鎌倉時代から室町時代にかけて兵庫津が国内港だけにとどまらず国際港としても果たした役割が学べた事は収穫であった。なかでも感じたことは神戸大学や大阪大学の国立大学の両校間で学術交流が盛んに行われていることに驚かされた。



休憩の合間に生田雅楽会による雅楽の演奏があり、また、演奏した楽器、それぞれの特徴についての説明もあり、なごやかなひと時を過ごす事が出来た。

続いて神木哲男神戸大学名誉教授による 15 世紀中頃の兵庫津が瀬戸内における水運の果たした役割をレジュメに基づいて具体例を挙げながら映写機を併用しわかり易く解説がなされた。

神戸に関わる関と云えば、周知の如く百人一首でお馴染みの「淡路島かよふ千鳥の鳴く声に幾夜寝ざめぬ須磨の関守」源兼昌の歌が思い浮かぶのではないだろうか。陸関か海関かは定かではないが、奈良時代の関は通行税的なものは徴収せず摂津国と播磨国の境界(赤石の櫛淵)の関所としての役目を果たしていたと推測される。

兵庫関は解説によると重源上人(東大寺の僧)が 1196 年大輪田の泊の修築費用に充てる為、出入りの船から税を徴収したのが魁となり、延慶元年(1308 年)東大寺が兵庫津の北関を興福寺が南関を 15 世紀末頃まで管理するに至った。その記録の一部が東京大学で文安 2 年 1・2 月の升米納帳と置石納帳が保存されていたが、戦後、歴史学者林屋辰三郎氏が収集していた古文獻の中で、東京大学の保存版の続きとなる文安 2 年 3 月から翌年 1 月までの史料を発見され、昭和 56 年(1981 年)補修翻刻作業を経て「兵庫北関入船納帳」として一般に公開されるに至った。それ故、あまり馴染みが無いのはその理由からである。

このテーマを研究論文として皇太子徳仁親王が「兵庫北関入船納帳の一考察」と云うタイトルで交通史研究第 8 号(1982 年)に発表されている。徳仁皇太子が兵庫関に関心を示され、研究に心血を注がれている姿を思い浮かべると地元の歴史を愛好する者にとって心強く、励ましとなる言葉に表わせません。

北関の所在地は佐比江の入江付近、南関は関の名残と思われる関屋町の在った須佐の入江付近が比定されている。兵庫津の繁栄も 15 世紀後半までで応仁の乱(1467 年)以降、明、朝鮮、琉球の船の出入りも減少し港としての役割も泉州堺に移行し関も自然消滅していったのは惜しまれる。

文末に一言申し上げたいのは昭和 60 年～63 年兵庫区長を務められその後須磨区長も歴任された重成裕氏が念願の「兵庫北関入船納帳」の研究成果を氏が所属していた神戸史談会(明治 38 年創立)で 2 回にわたり講演され、史談会誌 308 号にも論文を発表されたが惜しくも昨年お亡くなりになられ人一倍研究に専心されていただけに残念至極、哀悼の意を表します。

このシリーズも当分続くとの事。次回を楽しみにして筆を置きます。

(まえだ・あきよし／郷土史家)

## 第5回 地域史卒論報告会開催される

吉原 大志

2010年3月20日、神戸市立兵庫勤労市民センターにおいて、第5回目となる地域史卒論報告会が催されました。この報告会は、史料ネットと神戸史学会が共同で主催しているもので、2006年から毎年開催されています。

卒業論文の多くは、学会や地域に向けて発表できないままになってしまうのが現状です。卒論報告会を設けることで、大学で歴史学を学んだ学生が、市民と交わり卒業後も歴史と社会に対する関心を持続してほしい、また大学での地域史や歴史資料保全の取り組みの成果を、市民と共有することで、歴史資料保全への理解の裾野を広げたいと考えています。

今年は、井澤禎明さん(神戸大学)「日露戦後期における農事改良事業の一考察—淡河川・山田川疏水事業を通して—」、中野佳和さん(神戸大学)「旧制中学校の受験競争をめぐる史的考察—大正期の兵庫県を中心に—」、細川絵美さん(大阪市立大学)「近世大坂の相撲渡世集団」の3本の報告を行いました。

ここでは、今回報告していただいた3人の参加記を掲載します。それぞれの文章からは、自らの研究成果を市民の方々にどう伝えるかについての試行錯誤が読み取れるとともに、卒論報告会をきっかけとして自身の卒業論文を捉え直し、大学生活のなかで地域史を学んできたことの意味を再考するに至ったことが記されているように思います。

報告者の方々は現在、高校教員や行政職員として新たな生活を送っています。今後のご活躍を期待します。

(よしはら・だいし／歴史資料ネットワーク事務局員)

### 地域史卒論報告会感想

井澤 禎明

今回は地域史卒論報告会ということで、これまで大学の中で行ってきた卒論報告と異なり、多少の緊張はありつつも新鮮な気持ちで報告することができました。大学の卒論報告では主に、卒論の執筆に向けて史料を解読し、論を組み立てていくことを主眼にしてきました。先行研究で述べられていることや残された史料からわかることをまず明らかにし、そこからどのような観点で対象を分析するかを定め、四苦八苦しながら論文に仕上げてきました。今回は自分の報告をはじめて聞く方々がほとんどということもあり、卒論の内容以上に自分の利用した史料を出来るだけたくさん見てもらい、地域の史料を知っていただこうと思いました。地域にどのような史料が残されているのか、そしてそこからどのように話を組み立てて一つの卒論にしていっていったのかが分かればと考えました。自分自身にとっても、卒論完成後に改めて個々の史料を読み直すことにより、史料の内容や論文全体との関わりなどについて再検討する良い機会になりました。また参加者の方々は各報告に真剣に耳を傾けられ、なかでも特に地域の特徴や独自性を交えた地元の方ならではの指摘・ご助言をいただけたことが印象深かったと思います。



同時に何気なく使っていた史料そのものについても深く考えさせられました。私が卒論で史料を利用できたのも、対象とする事業に関して記録を残し、それらをまとめた人、史料を保存してきた人、歴史資料として利用できるよう整理を行った人たちのおかげであると言えます。そしてこれらの史料を分析、検証して大学のゼミや地域の方々と議論をすることによって、さらに理解を深めることができるのだと今回の報告会で感じました。このように様々な人の手によって地域の中で史料が守られ、それが新たに活用されるという過程が実感できたのではないかと思います。地域史を学ぶ醍醐味は一つの地域史料のもと、多くの人々が問題を共有することで人と人との関わりやつながりが生まれ、身近な史料から物事をより実証的に分析し、その意義を問うことが出来るという点にあるのではないのでしょうか。

大学を卒業した今、私は留学生支援など海外との人材交流に関する仕事に携わっています。技術や経済など実利の面だけではなく、こうした歴史文化などの精神的な面をも含めた“真の国際交流”の実現に寄与できるよう努めていきたいと思っています。

最後になりましたが今回、貴重な機会を与えて下さった史料ネット・神戸史学会の皆さん、報告会にご参加下さった皆さんにお礼を申し上げます。ありがとうございました。

(いざわ・さだあき／神戸大学文学部卒業生)

## 地域史卒論報告会を終えて

中野 佳和

今回の地域史卒論報告会を終え、書き上げてしばらく時間の経っていた自分の卒業論文と改めて向かい合うことができた。本来なら卒論は一度書き上げてしまえば、それで終わりという場合がほとんどであるだろうが、今回のような報告会を前にして、もう一度卒論を見直す機会が与えられた。しかもこの報告会は専門家のみならず一般市民をも対象に発表するということだったので、いかに分かりやすく、しかしアカデミックに伝えるかということについて自分なりに随分時間を費やしたように思う。



自分自身、一度卒論を書きあげたものの、その内容が実に杜撰なものであり、かつ明確な結論を述べるには至らなかったということもあり、自分にとってこの報告会までの準備期間は絶好のチャンスであった。卒論の内容が書き上げた段階のままでは結論が不明であったので、論点について自分なりの一つの結論を導き出せるよう再考察を加えた。

再考察を加えたものを実際に報告してみると、想定をしてもみなかった質問や意見が飛び出した。日本史専門の方からの厳しく、かつ的確な意見もあれば、一般市民の方からの新鮮な視点や素朴な疑問など様々飛び交い、質疑応答の時間も、終始焦りながらも自分の研究と向き合っていたことが印象に残っている。

報告を終えてみて一番感じたのは、多くの方々に自分の卒論を発表する機会を持つことが、責任感を伴うものであり、自分の研究にプライドを持たなければ発表できないということであった。人に報告する以上、自分の発言にはそれなりの根拠が必要であるし、報告内容がいい加減で、かつ自分自身が研究の内容に自信を持てないようでは、報告すること自体が困難である。今回の報告会が自分の研究に対してのある種の自信を与えてくれたように感じる。

この報告会を通じて、これからも自分の卒論を大切に、自分の研究に誇りを持ち、機会あればさらに研究を継続していこうとすることができた。今後、地歴の教員として働く以上、生徒に歴史を教えるだけではなく、自分自身も絶え間なく歴史について学び、研究していくという姿勢を持ち続けていきたいと思う。

(なかの・よしかず／神戸大学文学部卒業生)

## 第5回地域史卒論報告会参加記

細川 絵美

私は「近世大坂の相撲渡世集団」という卒論を書き、第5回地域史卒論報告会においてその内容について報告するという機会を頂戴しました。報告会から1ヶ月と少しを経た今、卒業論文のテーマ決定から報告会までを振り返ることで報告会の参加記としたいと思います。

私の卒業論文内容は、18世紀中・後期の大坂における相撲渡世の実態に迫るといったものでした。

もともと大相撲のファンだったため、2回生ごろには「卒業論文は相撲で書こう」という漠然とした思いを抱いていました。また、新田一郎氏の『相撲の歴史』という本を読み、相撲史の研究が意外なほどに進んでいないことを知り、興行としての相撲の歴史を研究したいと思うようになりました。

ところが、困ったことにどうアプローチしていいのかが分かりませんでした。そこで手当たり次第に論文を探し回っているうちに、飯田直樹氏が『大坂相撲由来書』(大阪府立中之島図書館蔵)についてご紹介されている論稿にたどり着きました。以後、この『大坂相撲由来書』が私の卒論の主軸となったのでした。

『大坂相撲由来書』は寛政7年興行の勧進元である浪川半右衛門が書き記したもので、大坂相撲の由来からはじまり、勧進元の決定から興行終了までの運営プロセスが記されています。浪川半右衛門は大坂相撲の頭取(年寄)で、相撲渡世集団内部の人物によって書かれたという点、そして興行における集団の具体的な動きが分かるという点で、この「大坂相撲由来書」は非常に貴重かつ有効な史料だと言えます。この『大坂相撲由来書』に加えて、浜松歌国の随筆集である『摂陽奇観』や『浪花文庫』等、同時期の記述を参考にしつつ、興行のプロセスとその特殊形、相撲渡世集団の構造(頭取一師匠一弟子の関係)や、相撲渡世集団の周辺に生きる人びととの関係について考察することにしました。

しかし、材料が揃ったにも関わらず、就職活動や公務員試験など諸々の事情に加え、私の怠け癖が災いして、思うように作業が進まず、指導教官の塚田孝先生に随分ご迷惑をおかけしてしまいました。実際のところ、上記のような論文の構成が出来たのも、4回生の11月下旬のことで、先生方の助言あってのことでした。

そのような状態でしたので、全く以って不完全ながらも、ひとまず卒業論文を書き上げたところで、今回の報告会のお話をいただいたとき、本当に信じられませんでした。まずもって、決して人前でお話できるような完成度の高い内容ではありませんでしたし、人前で話すのも得意なほうではありません。しかし、実際に会場で報告してみると、大相撲の歴史というイメージしやすい内容も手伝ってか、皆様とても興味深く聞いてくださったようで、報告後の質疑応答も盛んなもの



となり、とても充実した時間を過ごす事ができました。史料ネットのみなさま、本当にありがとうございました。

大学卒業後、私は自治体の職員として勤務しています。「障がい福祉」という日本史とはかけ離れた仕事に従事しておりますが、卒業論文の執筆、そして今回の報告会という得がたい経験はこれからもずっと私の誇りです。

最後に、財政難による人員削減と行政サービスの多様化で、新人ながらも想像以上の仕事の量に忙殺されております。そのような事情をご了承の上、乱文何卒ご容赦ください。

(ほそかわ・えみ／大阪市立大学文学部卒業生)

## 【連載】史料ネット 古文書返却の旅 その二 長濱家文書

添田 仁

### はじめに

「返却の旅」の第二弾、長濱家文書である。

2000年、神戸大学大学院への編入を目指して文学部に出入りしていた私が、生まれてはじめてさわった古文書、それが古文書室に保管されていた長濱家文書だった。あれは夏の古文書合宿だったと思う。右も左も分からないまま、折りたたまれた古い和紙をふるえる手であけ、判読できそうな文字を拾った。原稿用紙には空欄が目立ったが、歴史研究の第一歩を踏み出した私の心は満たされていた。

長濱家文書は、阪神大震災で被災した。1995年4月13日、被災史料の巡回調査を行っていた史料ネットメンバーによって確認、緊急措置として神戸大学に搬送された(坂江渉「阪神・淡路大震災と地域文献資料のその後」『第8回歴史文化をめぐる地域連携協議会予稿集 震災から15年—地域歴史資料の現在—』、2010年)。私は、レスキューの場には当然居合わせてないが、縁あって返却の場に立ち会うことができた。

神戸大学に移管されて15年、私と出会って10年。まずは、所蔵者である長濱萬蔵氏に、史料の返却までに膨大な時間がかかってしまったことを深くお詫びしたい。

### 長濱家文書の保管・整理状況

当初段ボール箱におさめられていた史料は、それぞれ中性紙箱に移し替えられ、神戸大学文学部の古文書室に保管された。1997年から、日本史教室の古文書合宿、さらには史料ネットが市民とともに行った「被災史料整理」で目録カードを作成した。それでも半分以上が未整理の状態だった。その後、2006年度から文学部海港市研究センターが行った神戸・兵庫港関係史料調査で全点の目録が完成、2009年度には同地域連携センターが画像データを作り、整理は完了した(目録・画像データは神戸大学文学部でも保管)。

### 長濱家文書の概要

長濱家は、摂津国菟原郡脇浜村(現、神戸市中央区脇浜町)に居をかまえ、江戸末期には「播磨屋」という屋号で商売をし、明治期以降には村役人もつとめた家である。とくに長濱礼蔵氏は、神戸実業銀行の設立など地元経済の発展にも尽力し、神戸市議会議員までつとめている。

史料の点数は1,772点におよぶ。作成年代は、江戸時代の中期から大正・昭和期までと幅広い。内容は、脇浜村や葺合区の行政にかかわる史料と、長濱家の家政にかかわる史料に大別される。前者には、脇浜村の宗門人別改帳や人別状も多く含まれるが、特筆すべきは一里山（六甲山地の西部、東西に広がった林野一帯のことで、南から順に口一里・中一里・奥一里と分けて呼ばれる）の利用をめぐる山論の史料が多いことである。とくに、中一里山をめぐる、六甲山地に隣接する村々の間で、用益権をめぐる争いが大正期まで続いており、当時脇浜村が属していた葺屋庄の村々で共同作成したとみられる文書や絵図が多く残されている。そのほか、葺合区の運営にかかわる史料や、脇浜沖の漁業、ならびに大正期に脇浜におかれた神戸魚市場にかかわる史料なども見られる。

入会山としての六甲山地、優良な漁場としての灘浜といった、現代の景観からはとても想像できない、古き良き時代の神戸の姿を復元できる好史料群であるといえよう。

## 返却の様子

2010年5月10日、奥村代表、三村昌司氏とともに、返却する史料をたずさえて長濱家を訪ねた（同年1月21日にも奥村代表とともに長濱家を訪ねたが、その日は大雨だったために史料自体の返却は延期していた）。ご当主の萬蔵氏は、大事な史料を15年間以上も借用状態で放置していた不逞の一行を快く迎え入れてくれた。

当日は、史料を入れた中性紙箱6箱のほかに史料目録・画像データをおさめたHD、一部史料を複写・翻刻したテキストを持参して、史料の内容説明を行った。江戸時代の山論や水論の記録を紹介して、史料群のうち村や区といった共同体で作成された記録が大半を占めていることをお伝えした。説明をひととおり聞かれたあと、萬蔵氏が言われた次の言葉が印象的だった。「古文書の名前は『長濱家文書』となっていて、実は『脇浜地区文書』としての性格が色濃いわけで、そんな住民の共有財産としての古文書を守っていくことの責任を感じますなあ」。

## 長濱家文書と災害

長濱家文書は多くの災害をくぐり抜けてきた。震災は勿論のこと、実は1945年の神戸大空襲も奇跡的に回避していたというお話を聞くことができた。長濱家はもともと神戸市葺合区（現、神戸市中央区）にあったが、1940年に軍需工場の用地として接收されてしまい、現在の場所に引っ越してきた。直後の1945年3月の空襲により、葺合区を含む神戸市東部の海岸部は壊滅的な状態となったのだ。このときの引っ越しがなければ、長濱家文書は歴史の波間に消えていったかもしれない。当然のことではあるが、史料は自然にのこるものではなく、のこそうと考えた人によってのこされる、その思いを強くした。

## おわりに——活用に向けて——

長濱家文書は、すでに大学生の卒業論文、小学生向けの古文書説明会の素材として活用されている。また、神戸大学文学部地域連携センター編『水道筋周辺地域のむかし』（2007年）では、六甲山地の利用をめぐる阪神間の村々の歴史を知りうる貴重な史料として紹介されている。

われわれにできることは限られている。まずは、史料の存在と価値を市民の方に広く知っていただくことで、地域全体として史料を守り伝えていくことができる、そのための素地をつくっておくことだろう。現在、これまでの研究成果も活かしつつ、長濱家文書を中心とした脇浜地区の歴史展示会を企画、準備中である。

付記 長濱萬蔵氏からご寄付をいただきました。史料ネットの活動にご理解・ご支援を賜りましたことを、この場を借りて厚くお礼申しあげます。被災史料の保全・活用のために大切にさせていただきます。

(そえだ・ひとし／神戸大学大学院人文学研究科特命助教)

## 2009 年台風 9 号被災史料救出活動支援募金 会計報告

このたびの災害についての緊急募金に多くのご協力をいただき、誠にありがとうございます。

おかげさまで、このたび皆様からいただいた募金の総額は、676,629円となりました。

史料ネットでは、のべ 189 人が兵庫県佐用町・宍粟市を中心に被災資史料の救出・保全活動を行いました。募金の収支について下記のとおりご報告いたします(2010年5月15日現在)。

### ■収入の部

| 摘要     | 金額         |
|--------|------------|
| 前年度繰越金 | ¥354,727   |
| 募金     | ¥676,629   |
| 貯金利子   | ¥581       |
|        |            |
|        |            |
|        |            |
|        |            |
|        |            |
| 合計     | ¥1,031,937 |

### ■支出の部

| 摘要         | 金額         |
|------------|------------|
| 修復消耗品      | ¥62,083    |
| 備品         | ¥42,705    |
| 印刷費(チラシなど) | ¥99,300    |
| 交通費        | ¥174,479   |
| 宿泊費・食費     | ¥96,265    |
| 口座徴収料金     | ¥11,450    |
| ボランティア保険   | ¥3,000     |
| 雑費         | ¥525       |
| 次年度繰越金     | ¥542,130   |
| 合計         | ¥1,031,937 |

活動内容についての詳細は、過去のニュースレター、史料ネットブログ等をご参照ください。また、ご不明な点がございましたら、歴史資料ネットワーク(s-net@lit.kobe-u.ac.jp)までお問い合わせ下さい。

重ねてになりますが、史料ネットの活動にご理解いただきご支援の手を差しのべてくださいました皆様へ、厚く御礼申しあげます。誠にありがとうございました。

今年も、豪雨や土砂災害の被害が各地で報告されています。いまのところレスキューの要請はありませんが、いつ、なにがおきても不思議ではない状況です。史料ネットの活動を今後ともお心に留めていただければ幸いです。

歴史資料ネットワーク

史料ネット NEWS LETTER No.63 2010年7月30日発行

編集・発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学文学部内 史料ネット

TEL&FAX:078-803-5565(開室時間 平日の午後1時~5時)

e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp

被災史料救出活動のようす・詳細は日々ブログに更新しています。

[http://blogs.yahoo.co.jp/siryo\\_net](http://blogs.yahoo.co.jp/siryo_net)